

■島嶼スケッチ

どうする奄美どうなる日本

越間 多輝鐘 (株)大島紬村 代表取締役)

1. 大島紬の不可思議物語

朝の6時、カラン、トン、カラン、カラン、トントンと大島紬の機織の箴音が優しく、時には力強く勇気づけられ朝の体内のエネルギーを揺さぶるように、静止した空気の中を宇宙の彼方から通り抜けて響き渡る。箴の音で一日が始まり、春夏秋冬を問わず、一年中奄美の女性達が奏でるオーケストラの交響曲の様に街のここかしこから聞こえて来る。やがて日没を経て深夜遅くまで続き午後11時ようやく子守唄代わりに箴の音を静寂な闇の夜が吸い込むかの如くに消えて行く。

大島紬の最盛期、奄美の各島々の集落から収入を求めて多くの人々が名瀬の街にやって来た、生活の為、より豊かな暮らし、子供の教育の為にそれぞれの目的で大島紬の生産と流通の一大拠点の名瀬市が活気に満ち、人口5万人近くになったのもその頃だ。

そうした中で龍郷町から移住し、子供の教育に捧げた女性もその一人で、あまりにもドラマティックで強く印象に残っている。ご主人は公務員の為、勤務地にある自宅に残り7人の子供と母子暮らしで、狭い借家宿舎で20年近くも努力の末、全員を大学に入学させ、見事卒業させた母性愛の偉大さに心から敬服し、頭の下がる思いが今も忘れる事は出来ない。それを可能にした大島紬の好況は街に活気が溢れ人口が増加し、生活必需品や飲食店娯楽施設等、様々な商店が立ち並び名瀬の街が日本の高度成長と歩調を合せる様に共鳴しつつ拡大して行ったのが昭和40年代50年代の事である。産地出荷額約290億円、末端小売価格約1500億の一大経済エリアを築いた。

ごく最近まで本場奄美大島紬の全国的知名

度は高いが、生産地の奄美大島がどこにあるかはあまり知られていなかった。伊豆大島、小笠原諸島、または沖縄県との答えが返って来て、近年まで鹿児島県であることをあまり知られていなかったのも事実である。県本土から南西に連なるトカラ列島と沖縄を中心とした琉球列島その接点に当り、地理的にも又動植物学的、民族的にも独特の歴史文化を持ち、奄美大島こそ日本女性の憧れである、一生に一度は着てみたい大島紬のメッカである。大島紬が産業化されたのは明治後期である。日本経済の発展と共に多くの技術革新を繰返しながら名実共に奄美経済の根幹をなす生命産業として社会的、経済的な貢献をした時代は過去のものになりつつある。

日本人の生活様式の変化、嗜好の多様化から情報文化社会に移行し、毎日のブラウン管等を通し人々の感覚が確実に変化をきたしている、古来日本民族は花鳥風月を愛し、好んで着物のデザインに取り入れてきた。しかし着物黄金時代が過去の夢となった今、作る、売る、着る、それぞれの人々が官民あげて現状打開の糸口を模索しているのが実情である。混迷の時代を迎えた時程、若者の行動を見逃す事は出来ないと思う、暖衣飽食の時代に彼らが求めているものはコンピューターグラフィックから繰り出される極彩色や様々な動きと変化である、それはリズムであり音、光、そして宇宙へと広がる感覚が生活に表現され現代ファッションの源流となっている。

ひと頃、異様に映った若者のファッションも現在では何の抵抗もなく我々の中にも受け入れられ、むしろその躍動感が斬新に感じる不思議さのなかで、昨今書店に立ち寄っても

呉服の専門誌よりヨーロッパファッションやヤング向けのモード誌に目が向くのが近頃の行動で我ながら驚く。それでもなお奄美大島の優れた文化、自然風土感覚のもとで創られた大島紬は和装業界、呉服の中でも最も特異にして恵まれた存在であり不可思議でもある。

1. なぜ奄美大島に定着したのかという不思議
2. 泥染めの不思議
3. 生産工程の不思議
4. 大島紬に従事している人たちの不思議
5. 島民の大島紬観の不思議
6. 流通及び取引の不思議
7. 大島紬ファン（ユーザー）の不思議
8. 大島紬ブランドの不思議
9. 大島紬の栄枯盛衰の不思議
10. 大島紬出現の不思議

●奄美大島紬の1300年の歴史から数多くのドラマや神話が生まれてきた。

一時奄美大島ではどんな不況でも大島紬さえやっていればと云う神話があったが、それが崩れた今21世紀型の産地の方向として、高級品を生み出す産地は豊かな文化を備え、豊かな生活が出来る場でなければならないとの提言がある、真に名言でそれを構築する強力な決意と総合プロデュースの出来る新しい頭脳や、業界の並々ならぬ自覚と努力と発想の転換が大島紬再興のカギと思う。

2. 試される価値観

奄振法が5年延長した。これに代わる済入の中心的産業がまだ見つからず育成されていない中、ひとまず安心と胸をなでおろしたことでしょう。10年延長を希望していたが5年の延長でどう有効活用出来るかが奄美の企画力が試される。これまでの奄振法で町が変り、島が変り、人が大きく変わった。戦後稲作中心から、国の減反政策により、休耕田が

発生、その後、転換作物奨励により田んぼが埋め立てられ、キビ作中心に変わって行った。奄美農業の代表作物であるキビも国内生産保護により守られている、奄美の気候風土土壤に適しているとは言え今後政府の補助政策が縮小、撤廃がいつ起きるか保障できない。もしキビ作付けがなくなった奄美経済を想像した時、補助金依存体質で来た奄美の人々の生活は一変し路頭に迷い戦慄さえ覚える。これまで奄美経済を支えて来た二大産業の大島紬と砂糖キビに将来の不安と暗雲が立ちこめ、これからどう克服するかが、奄美の人達の英知が今から必要不可欠であると同時に発想の転換による新しい産業の創出が待たれる。果たして新産業が生まれるまでに従来の産業を徐々に展開進化させることが大きな課題となる。

その前提として意識改革が必要と思われる要素が現在最も持てはやされ長年に亘り奄美で定着している社会生活スタイルのスローライフであるが、しかし経済活動として、外部との商取引は数量、金額、納期などの約束を守る上に成り立ち、信用を確立しないことには収益増を計る事業推進には、大きな障壁となり矛盾が生じて来たのが奄美型スローライフスタイルである。そのギャップをどう調和させ奄美島民の豊かさの物差しと、どういう暮らしがしたいか、ライフスタイルの価値観基準の設定が求められてくる。

3. 観光産業は道徳教育

気候温暖、風光明媚、人情豊かで住み易い事が奄美大島の宣伝文句でありキャッチフレーズである、しかし島民の人口は年々減少し止まる事を知らない。なぜか、生計を立てる仕事が無い為やむなく活路を求め、愛着のある住み慣れた奄美を後にする心境を考えた時、断腸の思いがする。一方学業の為、又将来の新天地を求めて島を離れ巣立ち行く若人達のエネルギーを惜しみつつも本土での成功

を祈るばかりであるが、人口減を黙視することは出来ない。これから期待される産業として観光産業が大きくクローズアップされ奄美大島の経済発展や振興の為、関係機関が積極的に取り組んでいる所である、奄美大島は大自然の宝庫である。2億3千万年（ジュラ紀）前の植物であるソテツや、4千5百万年前からの生きた化石と言われている、奄美の黒ウサギなど世界的価値のある貴重な生命が現在でも脈々と生息している。この現実を見た時、奄美大島は地球上の動植物の楽園であり世界に誇りうる多くの財産を所有している。観光の本質はそこに住んでいる人々が幸せで豊かに暮らしてこそ人が集まり繁栄するものと思う。ひと昔各村々では、朝起きの名のもとに子供たちが総出で毎日ほうきを持出し地区ごとの清掃をしていたのを思い出す。村や町の美化に役立ち清潔観念教育の風潮があったが、いつのまにかこれらの良い習慣が消えていった。美しい村や町を自分たちの手で、週に一度、家の周りや職場環境及び道路を清掃する運動を起したらどうだろうと提案したい。20分～30分定例日に島民一丸となって美化運動の実施である。口でいくら言っても汚す人がいる、守らない人がいる、道徳心を高める為にも参加させる方法を皆で考え出さなければならない。清潔で美しいところに幸せがあり人々が寄り集まってくる。

●島民が幸せで豊かな暮らしを求め、交流人口の増加により多くの外貨導入が促進される観光産業の振興を、長期展望のもとに企画立案し推進する事が望ましい、観光地として求められる要素を掲げて見る。

1. 美しい自然
2. 清潔で美しい街並み
3. 人々の豊かな暮らしと熱意
4. 芸術文化の継承
5. 民族特有の歴史
6. 公共的道徳心の推進

7. 伝統産業の振興
8. 他人を思いやるホスピタリティー
9. 人に接するマナー礼儀作法の習得
10. 環境保全と保護

4. 激動の中の日本

観光立国を打ち出した日本、21世紀のリーディング産業のひとつとして全国的に期待されている。その大きな意義は2つある。

- ①環境に優しく自然を大切に守ること。
- ②人々の交流による国際親善と総合理解による平和の推進そして地域の繁栄

しかし世界中の爆発的な人口増加等による摩擦が各地で生じている。先進国と発展途上国、富裕国と貧困国、資源保有国と無資源国や民族宗教の多様な弊害が噴出し、これらなお一層エネルギー、天然資源、利権等、紛争の種は尽きる事なく、環境破壊は地球規模で拡大している。特にわが国の近隣アジア諸国の急激にして旺盛な近代化は大量の資源とエネルギーを消費し、過去に日本が苦い経験を味わってきた公害をもたらすのは言うまでもない。その一端を日本企業も参画加担している事が問題解決を一層複雑にすることは容易に推察できる。

黒潮北上による東シナ海や、日本海の海洋汚染と共に、上空はジェット気流による大陸からの黄砂等が公害物質を含む光化学スモッグに変わった時、日本列島は廃墟となる可能性も否定できない。

ある著名な学者の発言が真実味をおびている。

「人類は神技を手に入れ、自由に使い始めた。科学技術によって高度な文明を築き豊かな生活を享受できたが、その反面地球環境の破壊に直面している。」国家的対策を誤ると日本の将来は後世に取り返しのつかない悔いを残すことになる。

2年前筑波大学が発表した日本、中国、韓国の公立中学生の意識調査のアンケート結果